個人研究経過報告

江連 和章
EZURE　Kazuaki

1. 研究テーマ

日英語の「発想」の言語学的分析と異文化間言語コミュニケーションへの応用

2. 研究の目的

本研究は、異文化間の言語コミュニケーションを究明する研究プログラムの一環として、当該コミュニケーションのあり方に大きく関与する、個別言語の発想、具体的には英語と日本語の発想を研究対象とする。その主な目的は、一般に「発想」と称される、個別言語の広範な領域に通底して観察される全体的特徴を、一般文法理論のレベルにおいて明示的に定式化することにある。「発想」という曖昧な概念的特徴を、言語学的実在としての理論へと具現化することにより、文法内における発想の位置付けと役割、そして実際の言語運用へのかかわり方をかなりの程度明らかにすることが可能になる。更には、その成果を基盤として、母語や文化の異なる人々が言語コミュニケーションをおこなう際、それぞれが有する相異なる発想がどのように働き合うのか、またどのような点に留意することが重要なのか等、適切な異文化間コミュニケーションの実践にむけての具体的な知見や方策を得ることも大いに期待できる。このような実践への応用という目的を常に視野に入れながら、基礎と応用の両軸をもって本研究を実施する。

3. 研究内容と進捗状況

研究計画として、日英語の事実調査を中心とする資料収集と整理、対象を特定化した上での資料分析と一般文法理論における記述及び理論的整備、異文化間言語コミュニケーションの実践に向けての応用研究という3段階を設定し、適宜調整を図りながら進める。

資料収集として、『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』創刊号でも一部報告したが、文法規則、語彙と語法、構文、表現・使用法、談話構造という大小様々な項目や単位の言語現象にわたって英語及び日本語の事実調査を長期的に行い、先行研究において複数指摘されている「日英語の発想」を暫定的な分類基準として、比較対照的に整理した。現在、その中でも研究を進める上で特に有意義と判断できる「結果志向性の強い英語」と「過程志向性の強い日本語」、そして「人間志向性の強い英語」と「自然・状況志向性の強い日本語」という二対のそれぞれ対照的な日英語発想について、一般文法理論における定式化を進めている。具体的には、事実としてこれらの発想が多く顕現するのが文、すなわち命題や事象の領域であることを踏まえ、統語論・意味論インターフェイスの一役を担う事象構造理論において、これら日英語の発想を比較対照的に記述し、それらの異同を明示、精緻化する作業を行っている。

異文化間言語コミュニケーションの実践に向けての応用研究については、現在その前提となる日英語発想の理論的定式化を進めている段階であるため、本格的な着手には至っていない。あくまでも暫定的ではあるが、本所プロジェクト研究「コミュニケーション支援ボランティア養成のための教材の研究開発」において、また平成 28 年度実施のコミュニケーション支援ボランティア養成講座、行政職員コミュニケーション能力向上講座、そして青少年向け異文化理解・コミュニケーション能力向上講座の実施内容において、現時点での成果を間接的に反映させる形で応用活用している。

4. 今後の展望

異文化間の言語コミュニケーションにおいて個別言語の発想が深く関与することは、大枠としてはかねてより指摘されてはいるものの、その詳細については示されていない。今後、計画に沿って本研究を継続、発展させ、個別言語の発想が異文化コミュニケーションにおいて果たす役割とその重要性を明らかにすることを目指したい。その研究成果を論考としてまとめると共に、実践的に応用することが重要となる。

また、その先の課題となるが、言語と文化・社会の関係の領域にまで調査研究を深める必要があると考える。一般に「言語と文化は密接につながり合う」という見解が繰り返し論じられているが、述べるまでもなく、そのような「言語と文化のつながり」を客観的かつ明示的に実証することは容易ではなく、関連領域においては更なる検証が求められている。特に異文化コミュニケーションの点からみると、言語及び言語コミュニケーションと文化との関連性はとりわけ重要な検証課題となる。この課題に対して本研究では、「個別言語の発想と当該言語圏の文化・社会との関連性」という、より特定的なテーマに焦点を当て、調査研究を進めたい。

個人研究経過報告

新谷 雅樹
SHINYA　Masaki

1. 研究テーマ

ある江戸人の異文化理解（五）――佐羽淡斎（一七七二～一八二五）の総宜楼詩碑をめぐって

2. 研究の目的

ある江戸人の異文化理解と銘打って佐羽淡斎一人に限定したが、それは江戸人の異文化理解の一斑を見て全豹をトそうとする野心から出たものである。

しかし淡斎という桐生の絹商人は多面的な人物で、一筋縄ではいかない。彼は士農工商の身分制をこえ、当時一流の漢学者、国学者と広く交流して、漢学のみならず国学も視野に入れた文化人である。

桐生の豪商淡斎の交際範囲は広く、江戸漢詩壇の一流詩人市河寛斎・大窪詩仏・菊池五山・柏木如亭の文化的パトロンであったのみならず、儒者の山本北山・緑陰父子のパトロンでもあった。また北山門下の儒者朝川善庵が儒学一本で食べていこうとして漢学塾をひらいたものの、なかなか門弟があつまらず、食うや食わずの生活を送っていたときに、毎年、二十両の送金をして困窮を救ったことで有名である。このことは桐生の人びとの自慢で、土地のひとはいまだに「淡斎先生」といい、「本朝の佐羽さん」という。分家が相当数あり、本家と区別するために、そう呼ぶのである。

淡斎の雅量はもう粋というほかない。北山門下の齋藤豹蔵が同門の閨秀の一人と恋仲になり、これが潔癖症の北山の勘気にふれて破門されるが、二人を桐生に招聘して夫婦とさせ、吟社を創設して豹蔵を盟主に押し立てた。これは桐生漢詩壇にとって画期的なことだった。町人の町桐生に漢学が隆盛したからである。町人に学問はいらない、というのは江戸時代において建前にすぎなかった。ここから桐生詩人の総集が出され、宋詩の研究書が出された。

淡斎の詩業は処女詩集『淡斎百絶』第二詩集『淡斎百律』として梓行されるが、二つとも装丁は美しく、白文によって世に出された。句読点すら打っていない。これは江戸明治の漢詩壇にあって異例のことである。ふつう漢詩人の誰もが、訓点付きで自作詩集を刊行した。それは一般の読者を想定し、広範に売れるためにそうしたのである。淡斎はその常例をやぶった。おそらく利益を度外視した私家版で、本場中国の漢詩人を意識したやりかたである。それゆえに両詩集は漢詩漢学の専門家を想定して無料で配布されたものと思う。そのせいで両詩集は今日では稀覯書となり、かろうじて国立国会図書館鶚軒文庫におさめられているにすぎない。金持ちの道楽と言えないこともないが、個人詩集『淡斎百律』は天下の珍本である。律詩は創作するに困難な詩形で、中国人でもこれをよくする人は多くない。いわんや日本人においてをや。

今日、佐波淡斎を知るものは少ない。この忘れられた漢詩人を闡幽顕微するために本研究を行った

のである。

3. 研究内容と進捗状況

淡斎研究は今回をもって終了する。百律中「神奈川晩望」「金沢道中」「武州金沢亭」の三首を紹介して、江戸時代の漢詩人の、とくに郊行詩の特徴を考究する予定である。その際、キーワードとなるのは「行楽」である。「人生行楽耳」という言葉は中国の正史『漢書』に出てくる言葉だが、中国の詩人は好んでこの言葉を使った。その影響を受けて、「御静謐の時代」と呼ばれた文化文政期のわが漢詩人にも好まれ、当時の文人の漢詩に頻出する。たとえば柏木如亭、田能村竹田、両者ともに「人生行楽耳」という遊印を持ち歩いたほどである。この「行楽」は単に物見遊山を言うのではない。山水詩における「山水之助」という重要な観念にもとづく。それは実際に自然美に接して、詩なり画なりの技量をあげようとする試みであった。この「人生行楽耳」と「山水之助」の関係を淡斎詩に見つけようと思う。

4. 今後の展望

淡斎の書簡十通、掛け軸一本を古書肆で手に入れることができた。前者によって彼の個人生活を、後者によって彼の書家としての側面を考究する。

淡斎は市河米庵について唐風の書を学んだ筈である。米庵はもと長崎で清医胡兆新から書を学んだが、長い研鑽を積んで独自の唐風書体を生み出し、門弟三千という書道の大家となった。

米庵は長崎の唐船を通じて梁同書に自分の書を見てもらい、嘉賞の言葉をもらった。梁同書は乾隆帝の台閣に連なったエリート文人官僚で、当時はすでに引退していたが、米庵の書に打たれて「銭唐九十二翁梁同書」という款記のある賛を送った。梁同書は清朝で一といって二とない書家で、今日の日本でも、その法帖は手本とされている。そういう大家のお褒めのことばに、米庵は発憤したに違いない。

淡斎の書と米庵の書を比較検討し、どういった影響関係にあったかを考察する。

また淡斎は谷文晁・文一父子、酒井抱一、呉竹沙などと交際があり、江戸文人画壇において、どういう働きをしたか、それを調査する。おそらく淡斎の文化的パトロンの側面が浮かび上がるだろう。

個人研究経過報告

山崎　ゆき子
YAMAZAKI Yukiko

1. 研究テーマ

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのフランスにおける日本観の形成:「ハラキリ」と「サムライ」を中心にして

2. 研究の目的

報告者は、『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』第 5 号において、論文「アンドレ・マルローにおける「武士道」―異文化理解の視座から―」を発表した。この論考では、20 世紀フランスを代表する作家の一人であり、日本文化への高い関心と深い理解を示していたアンドレ・マルロー(1901～1976)と武士道との関連、およびそれを通して、彼の日本理解についての考察を行った。具体的には、マルローにとって「武士道」とはいかなるものであったか、ということに加え、武士道に関する情報を彼がどのように得たか、という点に焦点を当て、異文化理解の視点からの解明を試みた。この研究を実施した結果、アンドレ・マルロー個人の日本理解にとどまらず、さらに視野を広げて、当時のフランスにおいて一般的にとらえられていた日本のイメージに関して明らかにしていくことの必要性が、次の課題として生じた。

19 世紀後半のフランスでは、絵画や工芸の分野で、日本の文化がジャポニスムとして流行し、大きな影響を与えたことは、すでによく知られている。しかし、それ以外の領域において、すなわちより一般的に、「日本」や「日本人」が当時のフランスの人々にとっていかなるものであったのか、また、そのようなイメージはどのようにして形成されたのか、ということは、フランスにおける日本理解、すなわち、異文化理解の過程と実態を考えるうえで有益であるにも関わらず、いまだ解明されていない。

したがって、今回の研究目的は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのフランスでは、日本および日本人はどのようにとらえられていたのか、また、そのような日本観はどのように形成され、定着したのか、を解明することである。そしてまた、それによって、異文化理解の実態の一端を明らかにすることも本研究の目的としている。

3. 研究内容と進捗状況

本研究を実施するにあたり、昨年度の上記研究からの継続性を考え、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてフランスにおいて一般化していた日本観の中から、今回は武士道関連に対象を絞ることとした。具体的には、マルローが強い関心を寄せていた「ハラキリ」およびその行為主体である「サムライ」を中心に研究を進めている。方法としては、次のような手法を採っている。すなわち、印刷と通信技術の革新により 19 世紀後半に、その内容の充実とともに大幅に発行部数を伸ばし、大衆に大きな影響を及ぼし

始めた新聞、および、小説・エッセー・旅行記など、多くの人々に影響を与えたであろう書籍等の資料を収集する。そして次に、その記述内容を調査することによって、そこに現れる上記の語の使用状況や変化をその背景とともに考察していく、というものである。

調査を進めた結果、開国したばかりの日本、すなわち、フランスとは全く異なる文化を持つ未知の国「日本」を紹介するなかで示された、当初のそれら２つの要素が、徐々にフランスにおいて、本来の文化的・社会的・歴史的コノテーションを持たない、いわゆるステレオタイプ的なイメージへと変化し定着していく状況が、明らかとなった。そしてその大きな流れは、背景とともに把握できている。しかし、さらに調査対象を増やして研究を進め、また、細部に関して詳細な確認作業を行うことによって研究結果の精度を高めていく必要があると考えている。

4. 今後の展望

まだ調査を実施しなければならない上記のような課題が現段階では残されてはいるが、この研究により、異文化というものがどのような形で、どのような過程をたどって受け入れられ、また、一般に定着していくのか、という異文化理解の実態の一端を示すことができるものと考えている。そしてそれは、別の側面から考えるならば、異文化を理解する際に、我々が考慮しなければならない点を示してくれるものとも考える。したがって、この研究は、異文化理解促進を図っていくうえで、有益なものになると考えられるため、成果は論考としてまとめ、発表することを予定している。

また、日本の文化は、武士道関連にのみ特徴があるのではなく、多様な側面を持っている。そして当時のフランスにおいて一般に定着したイメージには、武士道関連以外の構成要素も存在しており、それらについても調査研究する必要があると思われる。というのも、その形成過程は、今回明らかにしようと試みている武士道関連と、必ずしも同様ではないからである。したがって、他の要素についての調査も今後実施し、当時のフランスにおける日本理解の全体像を明らかにしていくことを、将来的な研究課題として視野に入れている。